

浄土

1986-12

昭和十年五月二十日 (第三種郵便物認可) 毎月一回一日発行
昭和二十四年四月二十八日 (運輸省 特別扱承認雑誌) 第三二五号
昭和六十一年十一月二十五日印刷 昭和六十一年十二月一日発行
第五十二卷 十二月号





十二月の秀句

仲見世の裏行く癖も十二月

石川 桂郎

寂として遠く騒がし夜半の冬

大須賀 乙字

浅草の日が沈みたり除夜来る

深川 正一郎

十二月号



これを偏く一切の色身を観ずる想とし、第九の観と名づく。

——『観無量寿経』真身観文

目次

法話

除夜の鐘に想う……………遠田弘俊……(2)

＜にこにこ法話＞

クリスマスやって!!……………長谷川 岱 潤……(7)

遺稿——長寿を願う心の訣……………故大野法道大僧正……(13)

宗教界・・・昭和六十一年の回顧……………高橋良和……(17)

み仏とともに =21=

——煎茶道のみ仏たち——……………安居香山 ……(23)

河西回廊の秋

「五大石窟の旅」旅日記(十五)……………木下隆一……(28)

◇◇長篇連載小説◇◇

立ち止まるな善導 第30回

才子変身

……………寺内大吉……(35)

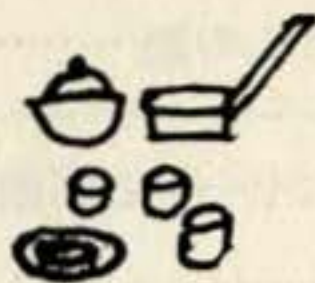
挿絵 松濤 達文

表紙絵「八つ手」 松浦春子画

除夜の鐘に想う

「年の瀬と誰か言いけん慌し音を立てつつ走る諸人」いつの世にも一年の終りともなれば誰言うもなく心急ぐこと乍ら、「押し詰りまして」の挨拶の交わさるることあります。

「祇園精舎の鐘の声、沙羅双樹の華の色」とは余りにも有名な語で、今更にことの次第を語るまでもないことですが、私はいつも一年の内で最も遠くて近いのは、元旦と大晦日だと申しています。



とおだこうしゅん
遠田弘俊

(東京・文京区慈眼院住職)

除夜の鐘を聞く度に、今年も亦終ったと、三百六十五日の過ぎたことに深い想いを走らせるわけです。その瞬間に翌年の元旦を迎えて、当然のこと乍ら、亦新しい年が来ます。まことに瞬時のことであり、間髪を入れぬことあります。こうした時の流れにも人としての感懐が湧くのは私一人ではないでしょう。特に日本人として一年の終り、除夜の鐘に想いを寄せることは凡ゆる面に数

多くのものが残されていることに気付くわけです。

さて、私達は殊に今年から明年にかけて、忘れてならぬ大いなる行事を迎えることでもあります。言うまでもなく三上人の大遠忌の佳辰であります。五十年に一度の巡り合いであることを痛感せずにはられません。凡そ五十年といえ、誰でも会える機会とは限りません。若い時代二十歳代までに会った人でも、既に七十歳から八十歳代の老境に入っているわけです。

前回の御遠忌は言うまでもなく昭和十二年であり、世は將に日支事變の勃発を迎えると言った騒然たる時代でありました。私も第一次召集で戦地へ向った頃であり、前回の大法要に就いては詳しく述べる記憶も定かではありません。まことに申訳けない次第であります。世は平和を称えて実に久しいわけですが、この国の発展は外見上眼を見張るものがあり、今昔の感を深くするものです。都会は勿論、地方の農村に到るまで、凡そ戦前の面影は何処にも見ることは出来ません。財貨の流通

を見ても、空恐しい感に襲はれるのです。余りにも激しい動きに全くついて行けないと言うのが本音ではないでしょうか。然し此の時、静かに七百年の往昔、三上人の方々、即ち、二祖鎮西上人、三祖良忠上人、知恩院二代源智上人の御苦勞を追憶すれば、あの動乱の世に民衆の上に盤石のような重きをなして、集い来る人々に大きな安堵を与え給うた祖師法然上人の跡を守り抜く為に、念仏宗団の基礎の未だ強固ならざるの時代、いかにして祖師上人の教えを後世に誤り無く伝え得るかと腐心せられたことは三上人それぞれの御伝記を拝すれば、深く感じられるばかりであります。

ここに、二祖鎮西上人のお言葉を『末代念仏授手印』の序に拝する時、「上人の往生の後には、其の義を水火に諍ひ、其の論を蘭菊に致して、還って念仏の業を失って、空しく浄土の業を廃す。悲哉、悲哉。何か為ん、何か為ん、爰に貧道齡己に七旬に及で、余命又幾干ならず。悩かずんばあるべからず。愁へずんば空しく止みなん」と。此の一節を胸にする時、末代の徒は涙なくしては頂

くことが出来ないであります。

勢観房源智上人に至っては、祖師法然上人に随時すること十八ヶ年、將に上人御往生の近づき給うを察知して、彼の「一枚起請文」を頂かれたるは、何と言っても源智上人ならではの思いであります。殊に最近玉桂寺から発見された阿弥陀仏像の由来を知った時、僅か一ヶ年足らずの間に、数万人の随喜の人々の連署を得て、御追孝の阿弥陀如来の尊像を造立なされたことは、当時の世代の交通事情等から察する時、想像に絶する程の師に対する情熱としか思えません。

次に三祖良忠上人の教化の足跡には、関東以西限なく、精力的な御活躍は、その多くの著述に併せ驚異の二字に尽きるでありましょう。こうした祖師の芳触を偲ぶ時、単に紙面に述ぶるのみでは事足りるとは申せぬことでありましょう。昭和も既に六十一年、此の世代に生を受けて、浄土宗徒として、開宗八百年、降誕八百五十年、善導大師一千三百年大遠忌等々特筆すべき行事を重ね修して来たのでした。

いよいよ、来るべき六十二年には右の三上人の大遠忌を迎えて感慨一入深いものがあります。

かくして過ぎし年を省み、来るべき年への望みを懷くのは強ちに私一人の感懷ではないであります。しょう。諺に、「味噌こしの底に残れる大みそか、越すに越されず、越されずに越す」と皮肉るものもあります。今年は何となく騒々しい年のようでありました。天体では、ハレー彗星現われて、何か不吉な予感めいたことに流言が飛ぶといったこともあり、地上では人間関係の多様化、国際政治の複雑さと言ったこと等々枚挙に遑なく、さすがに一ヶ年は永いことでありました。殊に数次に及ぶ中国からの引揚孤児の面接対応の様相は胸の痛むことばかり、何か古い傷跡を生々しく見る思いで、面談の人々の表情には言い知れぬ複雑さを感じずにはいられませんでした。今一つ心に残る事に、彼のベトナムから日本での治療を受けていた双体児の数ヶ月後の帰国の様子をテレビで見せられたことあります。日本の医学の高度に依る療養の結果、無事に本国へ帰ったことは何となく

ホッとしたことではありましたが、これから先の二人の生活はと思うと心の痛むことです。

一々の事件の大小を採れない雑多なことばかり、例へばいちめの問題等は殊に陰湿なことで、時代の変化の激しさに驚くばかりであります。こうしたことは起るべくして起るといった人間生活の宿業とでも言うべきでしょうか。諺にも「ローマは一日にして成らず」とありますが、そのローマも亡びる日があったのです。常に歴史は繰り返えし、人の世は正に輪廻そのものであり、形は變つても本性は些かも變っていません。殊に人間の本能から見る世界は総べて慾がらのみと言えましょう。此のことに気付く時、その慾を如何にして制御し、如何にして善導するかが教えの根本であるでしょう。

此の頃或る婦人の訴えを聞いて考えさせられたことでもあります。人の幸せとは何か。誰もが一応何不自由なく暮しているならば、この人は幸せ者だと言うでしょう。だがこの世に何不自由なく暮しているといふ人があり得るでしょうか。この婦

人はかつて主人と二人暮しで、生活もそれ程の不自由でもなく、仲も睦じく、事業も何とか生計も立って、愈々老境を迎える頃ともなれば、老後のことどもを考えて、二人の間に子供の無いことが一つの心にかかることでありましたが、主人は、自分の亡き後は妻としての暮しの成り立つようにとの心遣いから一応事業を整理して、その地所に貸ビルを建設して今後の糧とし、先づ一安心と言った様子で、これからの余生に夢も持っていたらたわけであります。ところがその幸せも東の間で、その後半年足らずで、大黒柱の主人がボックリと亡くなってしまったのです。それ以来追々とした日が過ぎて、中陰、百ヶ日と終り、やがて半年が過ぎました。春の彼岸に夫を失い、いよいよ秋の彼岸も終る頃、一人残された婦人の心に生前の言葉が「俺の亡き後は、お前一人の生活に困らぬように」と語り合っていた間柄、事實は全く何不自由なく、問題となる様なことが殆んどないにもかかわらず、この頃の心の空虚さは譬えようのない淋しさに襲われて、誰に訴える術もなく、悶々と

して、遺瀨ない毎日を如何に対処したらばとの嘆きを聞いて、静かに思うことでありました。人間の弱さを泌みじみと見せられた思いであります。この時初めて信仰の貴さを知らされることでありました。

その婦人に対して、まず第一は亡き主人への追慕にどうあるべきか、既に此の世に無き人への恋慕を何に依って替えるべきか——と。亡き主人は必ず仏の国に救われていらっしゃるこの信仰、今現に浄土に在して成仏の道を歩みつづけられているのです。姿形は肉眼には見えませんが、必ず此の世に在りました頃のお約束を果して、「俺の亡き後はお前一人には不自由はさせないように」との言葉は、単に物質的な生活だけではなくて、心の中にも必ず恵まれた生活が無くてはならぬ筈でありましょう。それでこそ浄土の信仰をするもの有難さがある筈です。静かに朝の仏壇の前に坐して御本尊様を拝し、その御光りの中に亡き夫を偲んで必ず見守って下さっていることを信じ、決して自分一人残されたという気持ちであってはなりません。

せん、とお話ししました。加賀の千代女の句のように「起きて見つ、寝て見つ、蚊張の広さかな」、今も昔も変りないのは人の世の姿です。此の婦人との語らいの中に他人事として聞き逃せない人間的苦悩を知らされる思いでありました。

今年も亦除夜の鐘を迎えることとなりました。「鐘に恨みは数々ござる」と、俗諺は謡っています。静かに行く年、来る年を想う時、元旦から大晦日まで、短いようで永く、三百六十五日の間には実に多くの記録が遺されていることであります。よくぞ此処まで生かされて来たものだ感謝せずにはられません。最近殊に各地の除夜の鐘に対して一種のショー的な流行の氣風のあることを考えさせます。昔は静かに仏壇に灯明をつけて、百八の鐘の音に耳を傾けたことでしたが、多くの人々が除夜を撞く為に列を作り、夜明け近くまで鐘をつく風景は果して煩惱消滅の意義がありやと疑われます。願くは本来の意義を頑味して鐘を撞く心、鐘を聞く心に人生を味得したいものと思うばかりです。

にこにこ法話

クリスマスやって!!



十二月に入ったばかりのある日のことでした。

ミーちゃん達なかよしグループは、クリスマスプレゼントに何を貰うか相談していました。

「わたしはザシキブタのぬいぐるみにする

わ」

「わたしは、だんぜんミッキーマウスよ」

「わたしはね、何もいらないの、そのかわりディズニールランドに連れてってもらうんだ」

「そんなこと言って、向こうでミッキーマウス買ってもらうんでしょう」

はせがわ たい じゅん
長谷川 岱 潤
(東京・品川区戒法寺住職)

「あたり、わかったやった、やだー」

「わたしもザシキブタやめようかなー」

「ねえ、ミーちゃんは何買ってもらうの？」

ちっとも会話に参加しないで、寂しそうな顔をしているミーちゃんに、ユミちゃんが聞きました。

「わたし、わたしはそんなのないわ、だってうちお寺だもん、クリスマスなんてやらないもの」

「へえ、お寺だとクリスマンやらないの、どうして、かわいそうだねえ」

「あれはクリストさんのおまつりだから、お寺は関係ないんだって、でもね、その分お正月にいっぱいプレゼントくれることになってるんだ」

「でも、クリスマスやらないなんて損じゃない、お寺ってかわってるね」

「わたしどうしてもわからないわ、なんでお寺だとクリスマスをしちゃいけないの、クリスマスとクリストさんが関係したって、クリ

スマスをするのとクリストさんは関係ないじゃない、わたしミーちゃんのお父さんに言っただけよ」

「そうよ、そうよ、わたしも言っただけよ」
話がおもわぬ方向に進んでしまい、ミーちゃんもびっくりしましたが、もうみんなの勢いを止めることはできませんでした。カヨちゃん、トモちゃんを先頭にみんなはミーちゃんの家に向いました。

「ただいま、お父さんいる？」

「奥でお塔婆書いていらしゃるわよ、どうしたの」

「うん、ちょっとね」

「みんな、どうする、あがる？」

「あがりましょうよ、失礼します」

カヨちゃんがいち早くさーッと玄関に入りました。

「あら、みんないっしょなの」

「はい、おじゃましまーす」

みんなは元気よくあがってゆきました。

「お父さん、カヨちゃん達も来てるんだけど入っていい？」

「ああ、いいよ」

「失礼しまーす」

「やあ、よく来たねえ、さあ、お入りなさい」
みんなは、お父さんの前にきちんと並びました。

「ずいぶんお行儀がいいんだねえ、まあ楽しんでなさい」

お父さんは、これは何か頼みごとだな、と内思いながら、机の上からお塔婆を片づけました。

「なんだい、何か相談かい？」

もじもじしながら、でもミーちゃんが口火をきりました。

「あのねお父さん、どうしてお寺だとクリスマスやらないの」

「わたし達どうしてもわからないの、ミーち

ゃんがかわいそうですよ」

カヨちゃんがすかさず言いました。

「ははあ、それでみんなで談判に来たんだな、こりゃ大変だ」

「お父さん、ふざけないで、わたし達おまじめなんだから」

「わかった、わかりましたよ、それじゃ話してあげるけど、納得はしてもらえないだろうなあ」

お父さんは話し出しました。

「ここはお寺で、お釈迦さまをおまつりしているところ、キリストさまは教会でおまつりしているの、クリスマスはキリストさまのお誕生日のお祝いだから、教会でお祝いするんだよ、ほらたとえば私の誕生日は、うちでお祝いするよね、でもカヨちゃんの家ではお祝いしてくれないでしょう、またその逆にカヨちゃんのお父さんのお誕生日は、カヨちゃんの家ではお祝いするけどうちではお祝いしたことないよね、それと同じなんだよ、その人

を一番大事に思っている人がその人の大事な日をお祝いしてあげることが、してもらう人も一番うれしいんじゃないかな」

「ふうん、なんとなくわかるけどさ、でもクリスマスってちょっと違うんじゃないかな、だって、カヨちゃんのお父さんの誕生日はわたし知らないけど、キリストさんの誕生日は知ってるもの、知ってたらお祝いしたっていいじゃない」

「うーん、でもね、ミーちゃんがキリストさんのことを本当に大事に思っているかということが問題なんだよ、でも、カヨちゃん、ユミちゃん、トモちゃんがうちのミーちゃんのためにわざわざ来てくれたんだ、その気持ちに感謝しておおまけにまけて、今年からわが家でもクリスマスをやろうか、でもまじめにやらなくちゃだめだよ」

「わあ、やった！」

ミーちゃんが飛び上がって喜びました。

「でもね、お父さんも君たちの願いをきいて

あげたのだから、ミーちゃんたちもお父さんのお願いをきいてくれるよね」

「なんだ、交換条件ね、まあいいや、でもあんまりひどいのはなしよ」

「ひどいことなんて言わないよ、あのね、十二月にはお寺でおまつりしているお釈迦さまにとってもたいせつな日があるんだよ、じつは、その日をみんなもいっしょにお祝いしてほしいんだ」

「なんだ、そんなことだったらお安いごようよ、毎日だっていいわよ、だってケーキ食べられるんでしょ」

「ミーちゃんはすぐケーキなんだから、まあそれもいいけど、ちゃんと話も聞いていい子にならなくちゃだめだよ」

「わかったわ、それでその日いつなの」

「その日はね、十二月の八日で、道が成る会と書いて、〃じょうどうえ〃って言っているんだよ」

「ふうん、何の日なのその日」

「お寺では、とっても大切な日なんだよ、みんなはお釈迦さまは知ってるよね、世の中の真理をみんなわかってしまったとっても偉い人だね、そのお釈迦さまも生まれたときは宇宙人やスーパーマンじゃなくて、みんなと同じ普通の人だったんだよ、だけど小さいときからうんと勉強して、大人になってからも人一倍苦勞して、そして想像もつかないような努力をして、世の中の真理がわかる人になったんだよ、じつは、その真理がわかるようになった日、その日がじょうどうえ、十二月八日なんだよ」

「なんだかむずかしいなあ、ようするに何をすればいいの」

「お釈迦さまのおさとの内容を理解するところが大事なんだけど、みんなにはちよっとむずかしいかなあ」

「むずかしい、むずかしい、むずかしいのなんてわたし違いやよ」

「わかった、わかった、ミーちゃん達にもわ

かるように話してあげようね、ミーちゃん達はいつもすぐく仲がいいよね、でも時々はけんかする時なんかあるのかな」

「たまにはあるよ」

「そんな時はどうだろう、どうしてわたしの氣持わかってくれないの、とか、何考えているかわからないわ、とかって思うんじゃないかな」

「そうねえ、時々ね」

「お父さんは、それが自然だと思うんだ、人間は人それぞれ一人ひとり生きているんだよね、ミーちゃんにとって自分のことが何よりも一番大事のように、カヨちゃんにとっても自分のことが何よりも大事なんだよ、自分がされたくないことは、相手もされたくないんだよ、わかるよね、人はそれぞれ、一つしかない大事ないのちを一生懸命生きているんだよね、だから、自分を大事にするように相手も大事にしなくっちゃね、そうしたらけんかなんかできなくなるよね、だからこの日は、

お父さんやお母さん、おじいちゃんやおばあちゃん、先生、それにみんなの意見を聞いて、けんかをせずみんな仲よくやろうねっていう日なんだよ」

「へえ、一人ひとりを大事にするってことなのね、わかったわ、わたしお釈迦さまの話もつと聞きたいわ、だから八日はケーキ買ってね」

「まったく、ミーちゃんわ」

その時、ずっとだまっていたユミちゃんが突然言いました。

「わたし、やっぱりザシキブタにするわ」

ミーちゃん達みんなはどっと声をあげて笑いました。

長田芳一画 五雨みなと文

絵本 ほうねんさま

B 6変型判／定価三〇〇円

右近れい子画 福嶋智誉編

絵本 おじぞうさま

B 6判／七二頁／定価四〇〇円

◎ 仏教まんが・教育図書

——多数発行——

大 道 社

〒102 東京都千代田区飯田橋二―二―六

電話(〇三)二六二―五九四四

振替(東京)一一八三四七

(遺)

(稿)

長寿を願う心の訣



元大本山増上寺法主

故 大 野 法 道 大僧正

人として健康と長寿を望むのが自然である。この生を受けても、心がついてから漸く成長し、世の中に出てから種々の経路を経るに従って、苦勞を重ねると共に楽しいこともあり、苦樂雜居して漸く老年となる。この間に於て、雜念が交々重なって去来し、起伏往来して落ち着く

所を知らず、ただ果然として歲月を送っている。この間に於て、心の底に常に蟠わだかまるものは長く生きたいという一念である。

こうした一念は、生命の続いている間ますます高まってくる。つまり、健康である限り生きていけると言える。しかし、

人生には限度があり、いつかは死なねばならぬことは定っている。ここに於て、問題があると言うことは、長寿を望む心の限度が、この世だけのものか、それともこの世の先があるものであるか、と言うことである。がしかしこれは各自が定めるべきことであつて、他から定めるべきものでない。死後の有無は、自分にあるもので、今の自分の心に画く情勢に依つて何様にも考えられることである。そこで考えられることは、今の心に思われることは心の底の念の力である。念は心の底に蟠まっている潜在意識の働きであつて、極めて自由に物事を感じることが出来るものである。そこで考えてみれば、長寿を欲する心の訣は、本心覚醒の喚起と言うことである。本心覚醒の喚起というものは、赤裸々たる人間本来の叫びで

あり、欲求である。このものは、心の中に存在しているが、現実としては、常に眼前のことに囚われてその真容を表わさない。がしかし、巖然として躍動している。

こうした本心覚醒を、浄土宗では、極楽に往生すると言う。中国の高祖、善導大師は、「共に金剛の志を発し」と言い、我国の法然上人は、「われ、浄土宗をつる心は、凡夫の、報土に生るることを示さんが為なり」と仰せられた。金剛とは、ダイヤモンドのことで、何ものを以つてしても打砕くことができない、最強最実なものである。法然上人の報土とは、阿弥陀仏の世界で、つまり、浄土であるが、これは申し分のない喜びに満ちた世界である。人間の経験から言えば、すべての世界は経験の所産である。しかも事

物は固定していない、動揺している。しかし、本心においては、希求であつて、現実でないから自由に動転し変化する。

浄土の莊嚴がはてなき功德を具えていると、説かれるのはそのためである。この浄土とは、阿弥陀仏の世界であり、阿弥陀仏とは、人間本心の万人共通の理想的表現である。その世界が報土であるか、ということが問題になっているが、これは本心の求めるものが、無限の情勢に應じる功德を具えていることを告げている。

実際としては、経験においては、一定の形相に固定しておる所に備わるものであり、それに定着する世界の応身応土でもない、自由に動転して変化する無限の功德を備えている。

また、法然上人伝の一説に、「あはれ此度、しおせばや」など仰せられるを、

乗願房承りて、「上人だにも加様に不定気なる仰せの候はんは、その余の人はいかがし候べき、と申しければ、上人打わらひ給ひて、まさしく蓮台にのらんまでは、いかでかこの思ひは絶え候べき、とぞのたまひける」とある。結局、法然上人も人間であつた。浄土宗を開かれた程の大徳であつても、結局、人間であつたから本心を具えておられた。その本心の叫び声が、ある時、現実に現われたのが、この詞である。浄土に往生したい、という本心覚醒の面が現われたのである。これを不定気と見たのは、乗願房の誤りであつた。故に、「まさしく蓮台にのらんまでは、いかでかこの思ひは絶へ候べき」と申されたのである。かように、人間の生涯の中ででき事である。つまり、人間の本心覚醒の喚起であつたのである。

好評の新刊

毎日新聞社刊

寺内大吉 著

『沢庵と崇伝』 上、下 (全二冊)

— 黒衣はためく日々 —

たくあん漬けで名を残した沢庵と……

この国の官僚の原型となった崇伝……

上巻二六二ページ 下巻二九二ページ

A5判上製 定価 各二二〇〇円

〈発行〉

〒100 東京都千代田区一ツ橋 毎日新聞社

…宗教界…

昭和六十一年の回顧

高^{たか}橋^{はし}良^{りょう}和^わ

○古都税はつづく

京都以外の土地の方なら笑っていらっしやるとさえ思う。よくもこんなに行ったり来たり、京都のものでさえもうやりきれない。

わたしなど相当の京都人で、それぞれの寺院の方とも懇意である上に、京都市の人たちとも交渉があるので、「君が居てどうしているのや」とさへここ

とを食っている。

しかしわたしもう萬才をした。萬才とはお手あげということ、どうにもならないことなのである。

詳しいことはここで記すほどスペースはないが、その経緯だけで許してほしい。

京都の街では旅館がさっぱりである。小、中、高の修学旅行は、奈良に行ってしまう。土産もの店もだめ、もっと興味あるのは、京都の台所を受けもつ

ている中央市場という食料品の市場は、ぐんと売り行きが落ちてしまった。

旅行者が減ったから、旅館が食料品を購入する必要がなくなったという事で、風が吹くと桶屋が儲けるのである。

○こちらは観光税の廃止

この京都の古都税と反対の町がある。これは岩手県の平泉町である。

ここには奥州藤原三代の藤原文化の中尊寺と毛越寺がある。中尊寺は金色堂はじめ、数々の国宝類があるし、毛越池泉廻遊式の庭園や「夏草やつわものどもの夢の跡」の句碑もある。この町では以前からこの両寺に、いわれる京都の古都税と同じように、寺から税金をとっていた。

ところが今度この町の両寺から、税金をとることを町がやめたのである。

町の主張はこうである。

この町は両寺があるから、全国から観光客がこの平泉の町にやってくる。それであるのにそれらの観光客から、税金をとるということは平泉町のイメージダウンも甚だしい。

そのような税金をとることをやめて、そのかわり観光にくる人々のためにプラスになるようなことをしよう。

ということになって税金を廃止した。

そこが京都の古都税と異なっている。そして町の費用で観光客のための駐車場を一千八百万円をかけて整備したり、その他の観光行政に力を入れることになったのである。

これなら中尊寺、毛越寺でも町に協力することになるのは、当然のことである。うれしい町の協力である。

一方京都の方は、目下六カ寺が頑固に拝観を停止している。門前で観光客はつまらない顔をしているし、門前町の土産ものの販売店は開店休業である。

また一方で市長のリコールの署名もやっけていて、

訴訟でかたづけようとしてゐる。市は断固としてあとにさがらない。

秘密の契約の文を発表されてまさに泥沼に入った京都市である。まだまだ当分はつづくと思う。

○メシヤ教の大騒動

大変な騒動になったのは、世界メシヤ教である。

昔は観音宗といったが、今は世界メシア教と改めた。静岡県熱海市に本部を置いている。

世界の逸品を所蔵している美術館として名高モア美術館が閉鎖した。何が理由であるかというところ、この世界メシヤ教の内紛である。

この世界メシヤ教の教祖岡田自観は、すでに逝去して今日その夫人である。

教祖が世界メシヤ教をはじめたのは、

直径二寸の如意宝珠の玉が、自分の腹のなかに入った。それによって自分は浄霊すると、必ず病気がなおる。

両手をあげて指をこまかに上下にふると、そこから光が出る、これを浄霊といって胸にお光さまをもっていると、その浄霊からみられる。

ということとで信者づくりをして、「光」と書いた字を所持させたことから、この世界メシヤ教の信心はじまった。

ところが、この岡田自観は世界中でたった一人浄霊の出来る人である。その教祖が如意宝珠の玉をもったまま逝った。二代目教祖はこの宝珠がない。しかしメシヤ教は存在しているが、二代目はそれなりに信仰の教えをたてに教化した。

このあたりから、いろいろと対立が起こったのが、今回の騒動になったといえる。

宗教の騒動としては、まことに暴力団そのままである。暴力を振ってメシア教本部に乗り込んできたから、怪我人も多数出ている。

そしてあの有名なモア美術館が、遂に危険を感じて閉鎖したのである。モア美術館に憧れて熱海にやってきた人たちにとっては大変な迷惑である。

なかなか問題はかたずきそうにない。宗教の改革であるし、革命は無血であるべきである。それをこのような暴力で争うなどは、まことに恥しいことがあり、暴力団に似たような行為はまさに新宗教とはいえ汗顔の至りであるといえる。

○世界宗教サミット計画

これは既往のことではない。

伝教大師が開創した天台宗の総本山である比叡山延暦寺では、明年春に比叡山開創一千二百年大法要を迎える。

そこでこの記念の行事として「比叡山世界宗教サミット会議」を開くことになった。

そこでさる九月二十九日にその発起人会が延暦寺で開かれ、日本の全宗教界の代表百数十人が集まった。

そして昨年の八月三、四の両日開くことになって、その交渉と招待をうけて九十二歳の山田恵諦天台座主は、はるばるイタリヤに赴いて、ローマ法皇はじ

めその他の宗教の代表と会見していよいよ本決まりになった。

来会するのはカトリック、新教のキリスト教、イスラム教、ユダヤ教、ヒンズー教、そして仏教では小乗の国と大乘の国、インドやスリランカ、中国、台湾からもやってくるようである。

そして名誉総裁には山田恵諦座主、名誉顧問に阿部野竜正全日本仏教会長、野脇浅次郎カトリック枢機卿、出口直日教派神道連合会会長、徳川宗敬教派神道統理、庭野日敬新日本宗連理事長などがあたることになった。

このサミットでは比叡山世界平和宣言などがなされるが、出席の宗教界代表には招請状が送られることになった。

伝統一千二百年の平安仏教の本山である比叡山延暦寺での大会だけに、おそらく成功に終わると思うが、それを期待したい。

仏教の一つの本山である比叡山のこの企画については、その思いきった施策を大いに讃いうるべきである。

○世界一の大仏建立

福井県には曹洞宗の大本山永平寺があるが、その福井県の勝山町にびっくりするような新寺が建立される。

それが信仰の本山となるのか、観光の寺院になるのかは、出来あがってからのことである。しかし建築はどんどんすすんでいる。

この福井県の勝山町は、永平寺に近い織物の町であるが、近年この織物の製産も下火になってきているところから、将来淋しくなることに気づいた町の出身者の出世した老人が、この新寺を建てようと計画した。

その人は主として大阪、京都など近畿の都市でタクシーをやっている相互タクシーの会長の多田清氏である。もちろんこの人はタクシー界きってのきれもので、また出世の人である。

そこで郷土の将来を考えてびっくりするような寺を建てることを計画したのである。

新寺の事業計画は二百二十億と聞いている。そしてその目玉としては、奈良の大仏より大きな仏像を安置し、そこに本堂を建てて山門やその他の建造物を配置して寺観を整えるということである。

その大仏は勝山町では出来ないで、京都において、その製作を命ぜられた鑄造所から物をつくり、それも出来あがったのをこまかく切って現地に運んで出来あがっている。

完成までにまだ日がかかるようであるが、見事なものである。

しか完成されればこの寺が何宗の寺となるのか、それとも県立となって人集めのために活用されるのか、それはわからない。

この寺を越前大仏というらしいが、永平寺の名が知られているので、そのお参りの帰りにこの越前大仏の寺に足をむける人もあると思うが、とも角個人の出資としてはとてつもない大きなことである。

○信者の焼身自殺

和歌山市の毛見の海岸で、さる十一月一日七人が焼身自殺をした。我が国でもこんなにあくさんの信者が、教祖の死を悲しんで、焼身自殺したというのははじめてである。

この新興宗教は真理(みち)の教会というので、どうやらキリスト教系の教派で、教会はこの教会が一つである。

教祖は宮本清治という人で、昭和二十五年に創設した。宮本教祖は元は国鉄職員で、近くの紀三井寺の観音さまの前で座禅を組み、神がかりになったということである。そして教えとしては、うそをついてはいけない、親孝行をしなければならぬ、人にはやさしくしなさいなどで、当り前のことが通らない世の中だから、当り前のことをまじめに実行しなければならぬなどと説いていた。

そしてこの宮本教祖は、十月三十一日に病死したので、その信者である身内の人たちは、教祖のあとを追って灯油をかけて自殺したというのである。

平素説いているこの教団の教えは、宗教というよりむしろ道徳に近い。

教会の庭には二メートルの台座があつて観音像が安置され、プラスチック製の鶴が二羽飾られていて、「心に花を」という立札があつた。そしてまた地藏さまもあつたという。こうしたことからすると仏教かしらと思うが、やはりキリスト教系である。

七人の焼身自殺の人々は、教祖のもとにいくことを非常にしあわせということを書いた遺書もあるし、この焼身自殺した人々の遺体をみた母親は、「真理御魂(教祖のこと)に仕え、天国にいつて幸せです」といつて後悔することがなかったというから、教祖がどのように教化したのか、それが知りたい。

自殺した人はこの本部に起居していて神の嫁と称していた。それにしても信仰とはいへ宮本教祖に対する帰依はすごい。

そしてこれらの人々の本葬は、本宗の寺院が行つたという。それにしても慈心不壊という仏教の教えでは、とても解決出来難いが、このような異常な出来ごとは、どのように解釈すればよいか、宗教ブームだけに、真剣に考えるべきである。

み仏とともに

—21—

—煎茶道のみ仏たち—



やす い こう さん
安 居 香 山

(大正大学教授・文博)

私の「緯書学への道」は、人生の後半のすべてであった。そしてこの道を照し続けて頂いたもう一人の恩師に、内野熊一郎先生がおられる。先生は私が文理科大学の助手をしていた頃、講師として着任され、その後、竹田復先生の後任として、漢文学研究室の主任となられたのである。

先生の専門は中国哲学の中でも、経学と言われる分野で、秦代や漢代の経書経説についての名著が数多くある。この学は丹念に經典について字句を比較考証することとが方法論の第一で、誠に根気の入る学問である。先生はそうした根気に強い学人で、多くの業績も、常人では成し遂げられないような根気の入った成果が多い。私達もよくお手伝いさせて頂いたが、その根気には負けてしまった。

温厚篤実な先生は、学生を心から可愛がられた。多くの学生が今でも先生の徳をしたって集ってくる。常に側近としてお仕えした私は、特にご面倒を見て頂いた。そして緯書研究についても、何くれとなくご助言を頂いた。緯書関係の私の著書には、殆んど先生の序文を頂いているのであるが、実は、私の結婚の仲人までもして頂

くことともなり、今日では、ご夫妻ともどもに、お世話になっているわけである。博士論文を提出する時には、主査として審査頂いたのも先生であり、その鴻恩は尽きるところがない。

私には養父母が数多いが、内野先生ご夫妻も、仲人をして頂いた親であり、まだまだこれからもご厄介になることが多い。私も漸く孫ができておじいさんになったわけであるが、こんな年になって、たとえ仮りの親があっても、ご指導頂けるといふことは有り難いことで、いつまでも生きて引導して頂けることを願っている。

尚、竹田復先生は、この十一月七日、九十三歳を以て忽然とこの世を去られた。頼りとしていた恩師を亡しした私の悲しみは、譬えようもない。心から冥福を祈るのみである。

○

今まで述べてきたような、中国哲学の学人としての道は、私の本道であり、またこれ以上に出ようにも出られないものであるが、ひょんなことから、私は煎茶道の道に片足を入れることになった。

私が大学で東洋文化史を講じていた時、一人の煎茶道の家元が、その聴講にこられることになった。女優の三浦光子さんの姉さんに当られる方で、煎茶道、黄檗幽茗流の家元である三浦純亭先生である。大正大学の榊泰純先生の姉さんが、三浦先生のお弟子さんということもあって、中国の文化史について何か講義を聞きたいという三浦先生の希望を、私の東洋文化史でかなえてあげたいというのが、そのいきさつであるらしい。

私の東洋文化史などというものは、いいかげんなものであると思うのであるが、三浦先生は毎週水曜日の一時間目に、欠かさず出席して聴講された。まだ私が専任講師の頃であったと覚えている。最前列にあって、着物を召した中年の婦人が席を取って聴いておられたわけであるから、私は毎時間緊張すると共に、とも角、下調べも努力して、そそうのないように相勤めた。全くとんだみ仏があらわれたものである。

その後、三年間にわたって聴講されたのであるが、二年目からは、私の論語の演習授業にも出席され、合宿ゼミまでに参加される熱心さであった。私よりご年で配あり、一流の家元でおられるのに、いつも下座に席を取ら



——親友四人組（真野・土居・新保各氏と）——

れ、寝る時なども、廊下で寝られるといった具合であった。

「私は先生の弟子ですから、これでよいのです」

これが、先生の口ぐせであった。そんなわけで、先生と親しくさせて頂くと共に、煎茶道の茶会にも、しばしば招待された。学生の中にも、そんなことで煎茶をやる者もでてきて、先生との縁は溢々深くなった。そんなことが縁となり、煎茶道連盟の夏期講座に、中国文化について講義することもしばしばで、ついに全日本煎茶道連盟の顧問にまでなってしまった。今から十数年前のことである。

いうまでもなく、茶道には千利休などによって確立された抹茶道を主としたものがあるが、江戸時代に至って、煎茶道が流行し、その茶祖と仰がれる売茶翁によって、新しい茶道が展開することになった。今日では、茶道というときは、抹茶道・煎茶道をあわせていうことになっている。茶会などでも、必ず両道の茶席が持たれるまでになっている。煎茶道の本部は、黄檗山万福寺にあり、

現在三十九流派が連盟に参加している。毎年、全国大会が万福寺で二日間にわたって行われるが、誠に盛んなもので、私も必ず参加することにしている。

顧問には、参議院議員の安西愛子、山口淑子さんなどあでやかな方が居られ、高橋良和先生もその一人である。私も全国の処々で行われる大会に引っ張り出され、安西、山口両先生などと、講演などしているが、これは又花やかなものである。本来、茶道については、かつて幡随院時代、日本茶道学会の抹茶を習ったことがあったが、煎茶道については、全く不案内であった。いまでもそれは変えることはないが、顧問とされるからには、全然知らぬというわけにもいかず、中国の文化や思想と茶道との関係などについて、ひまを見ては少し本なども読んで研究してみている。

そんなことが縁で、明德出版社から『茶経・喫茶養生記』の訳注本を出版するはめにもなり、又連盟の月刊機関誌である『煎茶道』に、「茶筆漫筆」という随筆を、毎月書くはめにもなっている。已にこの十二月で一六六回になるのであるから、随分永いこと、書き続けたものとあきれている。そんなことで、サイドワークとしての

煎茶道も、結構何かと仕事があり、各種の本などにも、雑文を書かされている。

とくに連盟の常任理事で、煎茶道東阿部流家元の土居雪映先生とは、連盟との仕事の関係から、特に親しくして頂き、あけ広げたご性格もあって、すっかり親しくなり、終に「第三の私の親友」だということで、互いに肝胆あい照しあっている。第三の親友とは、真野龍海君（大正大学教授）、新保義道君（前ハワイ開教総監）に次ぐ、第三の親友ということ、また大変なみ仏が、ここに現われることとなったわけである。

東阿部流は四回程ハワイ遠征茶会をされた。新保君がハワイに居ることをよいことにして、私とその仲介の労を取ったわけである。私が新保君のいるハワイに行けたのも、この流派の遠征茶会のおかげであった。そして私は、十八年ぶりに、新保君と会うことができた。それは、まことに涙の再会でもあった。昭和四十八年のことである。

それからしばしばハワイ遠征茶会があったので、その都度、行を共にさせて頂いたので、新保君とも、しばしば会うことになった。

昭和五十三年十月二十四日、私は博士論文が合格して、東京プリンスホテルで、その祝賀会をして頂いたことがあった。当然、新保君にも案内し、遠方だから祝電でくれるように頼んでおいた。

当日、いろいろなセレモニーが進み、やがて土居先生が挨拶に立たれ、

「ここで一つ、東阿部流から、先生に記念品をさしあげたい」

ということで、大きな白い箱が、数人のお弟子さんによって会場に運ばれてきた。私は家内とともに、「冷蔵庫でも下さるのかな」と話しながら、その箱の前にと導かれた。ところがどうであろうか、その箱の中から、ハワイに居る筈の新保君がでてくるではないか。私は全く驚くと共に、二人相い擁して涙にくれた。

実は土居先生の隠密のはからいで、ハワイから新保君が招待されていたのであった。まことに親友のはからいとは有り難いもので、その夜は、三人で大いに語らい合ったものである。人生では色々な友を得るものであるが、

晩年になって、こうした親友を得るというのは、珍しいのではなからうか。み仏にめぐまれた私の人生は、煎茶道という花やいだ世界の中で、又別な生き甲斐をみい出している。

そんなわけで、煎茶道をめぐるおつき合いは、いろいろなみ仏たちの出遭いとなっている。そして、私には、書緯の学人としての世界とは別な、異質な文化の中で、私なりな新しい道を歩かせて頂いている。

人生には、いろいろな道があるものである。どの道が本道で、どの道が脇道となるかは、その人により色々であるであろう。私もまた本道は、両親の願ったように、浄土宗の僧侶の道であるのであるが、正式に寺を持っていないということから、いささか学人としての道の方が、本道となっている。そこへ又、煎茶道としての横道もできてきている。しかし、やはり私は、み仏の道を歩くのが本道であり、またそれが、両親の最も願った道なのだと自戒しつつ、自からの道をあやまらぬようつとめている。

(つづく)

河西回廊の秋

「五大石窟の旅」旅日記（十五）……最終回

—上海から成田へ—



木^{きの}下^{した}隆^{りゅう}一^{いち}

（随筆家）

九月十三日の夜が明けると、汽車は緑豊かな稲田の中を走っていた。一夜にして、風景は黄色から緑色に一変していたのである。一面に広がる田園はちょっと見た目には平坦だが、畦で区切られているところを見ると、微妙な段差がついているのかも知れない。日本式に人の手によって植えられたらしく、稲は整然と並んで朝の微風に揺れていた。線路の両側は蓮田になっている。鉄道敷設の際、盛り土を掘り取った跡にできた水溜りを利用して蓮を作っているようであった。ぼつりぼつり咲いている名残花とも言える花を見て、花の盛りにはさぞ美観を呈したであろうにと惜しまれてならなかった。霧が車窓を流れる。その濃淡の中に、一期一会の人々が現われては消えて行く。家鴨を追って畦を行く少年。なぜかよく判らないが、水牛の背に胡座^{あぐら}をかいていた男。通過する小駅に佇んでいた娘たち……。みんな何を考え、何処へ行こうとしていたのであるか。阜^ふという字はこういう低い丘を指すものか、そんな思いがする丘の麓には一塊りの集落があって、家々からは朝の炊煙が上がっている。うまく言えないが、家の造りも昨日までなじんで来た黄土地帯の家とはかなり違っているようである。巡らした石の塀は、恐らくは洪水に備えたものであろう。池塘の草を刈って、池に投げ込んでいる男

たちがいる。と、水面が盛り上がって魚が跳ねる。草魚を飼っている池だったのだ。草を餌にする魚と話には聞いていたが、草魚の実体を見たのは初めてであった。コイ科の魚で成長すると一メートルにもなり、日本では利根川に戦時中放された草魚の子孫が棲んでいるという。身は淡白かも知れないが、市場性がないところを見ると大味な魚なのであろう。

霧の間に間に現われる人間だけでなく、風景もまた私にとっては一期一会である。三国時代、呉の領土だった頃は単なる湿地帯に過ぎなかったこの辺りが、肥沃な穀倉地帯に変わったのはいつの頃のことであつたかと、思いはまた三世紀の昔に逆戻りしてしまう。

私を「三国志狂」いにさせたのは、影浦さんという松山中学の東洋史の先生であつた。昭和十九年入学後間もない頃、講義はまだ秦の始皇帝が現われた頃だったが、突然「海軍関係の学校の転任を命じられたので、来週と再来週は時代はずっと下るが、三国時代の話をしたい。この時代は非常に複雑なでもっと時間をかけたいが、そうもいかないので……」と小柄な色白の先生は、チカリと眼鏡を光らせて言った。海軍関係の学校というのが兵学校だったか機関学校だったかは忘れたが、いまにして思えば、影浦先生には不本意な転任命令であつたような気がするのである。

三国時代の講義は素晴らしいものであつた。ノートはするな、ただ聴けという事だったので、私たちは黒板の字を目で追い、先生の言葉を頭に刻み込むしかなかったが、後漢末の宮廷内部の紛争に始つて晋の統一までの約百十年間を、一気呵成に正味九十分間で終わらせてしまったのであるから、もしノートをとれと言われてもとれるものではなかった。蜀の孔明の北伐では、土井晩萃の「星落秋風五大原」の詩が引かれたりした。家に帰って、「零露の文あやは繁くして……」の「零露の文」の意味を辞書で調べたのを、いまでも鮮やかに思い出す。さらに私の「三国志」狂いに輪をかけたのが、吉川英治の「三国志」だった。昭和二十年七月、怪我で寝ていた私に友達が貸してくれたものだが、全十四巻を

一気に読了した。それ程面白かったのである。繰り返し読み、三巡目、拾い読みしていた七月二十六日の夜空襲に遇い、一切は為有に帰してしまった。借りたまま焼いてしまった事が、いまでも心残りではない。

六時。時計を見るまでもなく、車内放送が民意発揚の勇壮な音楽を流し始める。そして今日も何曲目かに「北国の春」が聞こえてくるはずである。軟臥車の廊下を往事する人の数も次第に多くなってくる。早々と養堂車が開いているのかも知れない。日本人の少年少女の一団が賑やかに通り過ぎて行った。小学校高学年から中学生といった年頃の子供たちで、こちらを日本人と認めながら「お早ようございます」の挨拶もない。かなり傍若無人な振り舞いである。後で聞けば、群馬だか栃木だかの絵画教室の海外研修だという事であった。一私塾の研修旅行に、子供ら海外に送り出せる親の懐具合の豊かさを喜ぶべきかと思う一方で、日本の中にいて描くべき対象はないのか、何が海外研修だという気がしないでもなかった。そして、この子たちが何を見、何を考え、何を心得て帰るのであるうかと思うと、心の中をすうっと隙間風が吹き抜けた。一見しただけで「何だ、中国の農村の暮らしってこんなものか」などと短絡されては困るのである。中国の農民の暮らしは決して豊かとは言えないものの、私の知る限りでは、敗戦後農地開放が行われるまでの小作農の貧困ぶりはこんなものではなかった。「君たちのおじいさんやおばあさんは、もっとひどい暮らしをしてたんだよ、たった四十年程前までは……」聞かれば私はそう言ってやりたかった。しばらくして、一団は席に戻るべく、また賑やかに通り過ぎて行った。

「そろそろですか？」「そろそろですな」そんな事を言いながら、同室の人たちと期待した中国自慢の長江大鉄橋を渡ったのは何時頃だったか。「確か南京のちよっと上流に架かっている橋でしたね」「二階建の鉄橋のようですよ、上が鉄道で下が自動車道の……」「揚子江に橋を架けるのが長年の夢

だったそうですが、ソ連の技術ですか？」「多分ね、橋脚を造るのに苦勞したようだけど、難工事という点では、鳴門海峡の架橋の方が上じゃないかなあ」「中国の近代化には随分貢献してるんでしょね」「そりゃあそうですよ。輸送力の飛躍は大変なものでしょう。しかし一体何メートルあるんですかねえ」「来る前に調べておけばよかったな。長江大鉄橋を渡るなんぞという事は全く念頭にありませんでしたからね」長江大鉄橋に関しては、誰も確たる知識は持ち合わせていなかった。「まあ、素直に驚きましようや」バッグからカメラを取り出したりしているうちに、汽車は何の前触れもなく、そんなものがあるはずもなかったが、すでに鉄橋に踏み込んでいた。遙か下に揚子江の水面が見えた。濁ってはいるが、黄河程ではない。黄河の流れを滔々と表現するならば、長江は洋々たる流れであった。大きなフェリーボートが一隻、白波を蹴立てて溯江している。そんな景色がちらと目に入っただけで、長江は忽ち濃霧に閉され、シャッターチャンスは遂に訪れる事はなかった。「さすが揚子江ですなあ、聞きしにまさる川霧だ」車窓を渦巻いて流れる霧は、想像を絶する凄さであった。鉄橋を渡りきって左にカーブすると、僅かな時間で汽車は南京駅に到着した。ここにはもう霧はなく、広い駅の構内は意外にも閑整としていた。

中国最後の宿泊地上海に着いたのは昼過ぎであった。旧日本租界の中を抜けて、宿舍の上海賓館に入る前に、ガーデンブリッジ際の上海大慶で食事という事になったが、混雑しており、かなり待たされた挙句、結局は隣の浦江飯店で昼食を摂った。旧日本租界は、現在は市民の住宅になっているが建物は老朽化しており、早晚取り壊めされて建て替えられる運命にあるように思われた。昭和十五年から二十一年まで、亡父は独り、病身の妻と一人息子を故国に残して、三十代の一時期をこの中の何処かにあった旅館に下宿していた。社命による転勤であったが、黄浦江の畔りに立って、若かりし日の父は何を思ったのであろうかと思うと、ふと切ない気持になった。

私には父を偲ぶ事と、家族への土産を買う事位しか上海でする事はなかった。土産はいつでもよかったが、午後遅く皆さんの驢尾に付して繁華街の百貨店に赴く。週末でもないのに街は人の洪水で、女性の華美な服装が目を惹く。色彩もさる事ながら、デザインも北京よりはずっと洗練されている。国際都市上海の伝統はそんな所にも受け継がれているようであった。夜、上海飯店で別離の宴。最上階から眺めた上海の夜景は、やや明るさに乏しいかな、という気がしなくてもなかった。

九月十四日。晴れているが朝から少々蒸し暑い。久し振りに背広を着、ネクタイを締めたせいだろう。空港へ向かうバスの中で、ガイドの王さんが別れの挨拶をしたが、泣いてしまった言葉にならない。それでも「北国の春」を中国語で歌って饒にしてくれた。本当にお疲れ様、ご苦労様でした。

空港は大混雑していた。旅行客の殆どが日本人だったのには驚く。九時三十分発のノースウエスト機は約四十分遅れで離陸した。機内はガラ空きで、大型の中国の蠅がワンワン飛び交っている。こうやって世界各地から蠅が運ばれて、やがて成田の周辺に新型の強大な蠅が出現し……とSFめいた空想をするのは、旅の締め括りにしてはいささか味気ないが、密雲に阻まれて下界の眺めを楽しめないのだから致し方ない。成田ではゆっくり別れを交わす暇もないだろうと、皆さんの席を廻ってお別れの挨拶をする。石窟巡りのツアーに加わりながら、殆ど石窟を見なかった変なメンバーだった事を詫びなければと思ったが、それはさすがに気がひけてやめてしまった。高度を下げて、乗機は九十九里の海岸線を突っ切って陸地に侵入する。二度三度ガクガク揺れる。小さいエアポケットに陥ちによるだ。一段と高度が下がる。発った時はまだ一面の青田だったのに、刈り取られた田圃からは、幾条も藁を焼く煙が立ち昇っている。そうだ、この辺りは早場米の産地だったんだ。

僅か半月程留守しただけなのに、豊葦原の千五百秋の瑞穂の国は、いままさに実りの秋を迎えようとしていた。

(終)

年 賀 広 告 に

ご 協 力 ・ ご 助 成 を !!

師走の候、寒さ厳しき折、皆様いかがお過ごしでございましょうか。
さて皆様にもいつもながらご迷惑をおかけいたします、『浄土』五十三
巻正月号への「年賀広告」に今回もまた宜しくご協力の程、心よりお願い
申し上げます。

なお、いつも変らぬご愛顧を願い、まことにうれしく思いますが、どうか
新会員のご紹介の方もよろしくお願いいたします。

法 然 上 人 鑽 仰 会

◎ 年 賀 広 告 申 込 欄 (『浄土』53巻正月号)

--

＝ 広告費、一律二〇、〇〇〇円 ＝

△ ご 連 絡 欄 ▽

〒

(ご住所)

(ご芳名)

◎『浄土』表紙版画絵販売についての案内

『浄土』十二月号をここにお届けいたします。

どうか、『浄土』誌の充実と継続のために、会員諸兄の皆さまの暖かいご支援とご高配を心よりお願い申し上げます。

好評の『浄土』誌表紙版画絵は、本年の正月号より、松浦春子先生の清楚な作品を頂戴しております。今回も、松浦先生のご好意を得て、豪華額縁に装丁して販売させていただきます。額縁代も含めて、金二五〇〇〇円というお求めやすいお値段で、季節感に溢れた芸術味豊かな版画掛物が購入できるわけです。どうぞ振替にてご注文願えれば幸いです。

また、大きさの方は、『浄土』表紙絵よりはずっと大きく、約20cm×30cm位の大きさですが、額縁の大きさでいえば30cm×50cm程の大変豪華な一幅となります。

なお限定販売のため、予定数に達しましたら、申し訳ありませんが、おことわりさせていただきます。しかし現在のところ、昨年度の小林治郎先生の版画絵も、正月号から十二月号までの在庫も充分にありますので、ふるってご注文願えれば幸いです。

(申し込み先) 〒102 東京都千代田区飯田橋二―二―六

法然上人鑽仰会 振替(東京) 八―八二二八七

一兩日来すっかり少年と心うち溶けた王徐明は蜀の国へ去る前における善導との関係を語った。憚良も含風殿へあらわれた善導像を描出しながら、

「そんなに和上とはお近しい仲だったのですか」

「一度お目もじ致したいと願っていたが、悟真寺の場所がわからない」

「じつは手前どもも僧房の名を伺うだけで……いつも漂然と和上はお帰りになってしまわれるのです」

同じ終南山塊に棲みながら、善導は頑（かたく）なに所在を明かそうとはしないのであった。悟真寺は善導にとって俗風を洩入させない聖域だったのかもしれない。

「せめて悟真寺がどんな場所にあるのか、遠目に拝むだけでも、のう」

「私も、でございます」

長安の實際寺に止候する。光明寺の法座へも顔を出す。三階教団の化度寺においても説

法をする。善導の居所はつねに定かではなかった。

だが、気分まかせの流転ではない。そこには研学修法と行実践の教化、と仏法者としての軌道を正確に巡回する生き方があった。とりわけ教化ひとすじに生きる大乘僧であれば、大伽藍の奥殿におさまるかえってはおれなかったはずである。

その午後、大袋を背おった修業僧と行き遇った。王徐明は悟真寺の所在地を訊いた。

「もっと東寄りのはずですよ。藍草が生い繁った谷間をお深がしなさい」

「藍草ですか」

「染め物につかうあり草ですよ。御存知でしょう」

言葉を交わしだしてみると外見に似ず、修業僧は結構年齢（とし）を喰っていた。

「貴僧はどちらへ？」

王徐有は話題を転じた。

「私はついこの先、三乗谷へ降りるんです」

も在籍しなかった。だからこと「読高僧伝」の編者、西明寺道宣は、

——山僧善導。

と書かなければならなかったのである。

その善導が注釈した「観無量寿經」が君主を特別に扱ったり、権威にへつらったりした内容だったのは当然であろう。

三乗谷へ降りてゆく老遊化僧を見送った王徐明たちは、やがて赤紫の敷き物でもひろげたような美しい谷間を眼下に見た。ひとすじの溪流が東へくねって流れ出ている。そのあたり、山壁は切れており里へ通じてゆくのであろうか。終南山も此処までくると、相貌は隠和になっていた。

「極楽浄土の莊嚴だな」

王徐明は少年をかえりみた。

「お花畠……」

悟真寺の所在地は、

——玉川藍谷。

玉川はその溪流であろう。藍谷を藍田とも藍田県とも呼んだところからすると、里になり近い地点であったことが推察される。

藍草の茎が伸びきって、紅色の花びらが開いたとき、それが一面に染色されたら、まさに極楽浄土の花園だったのである。だからこそこの谷間に浄土の禪房悟真寺が建てられたのだ。

隋朝、浄業（五六四—六一六）のために信者たちが建立した、と伝えられる。

浄業は「観經義疏」を書いた浄影寺慧遠（五二二—五九二）の弟子である。浄土念仏僧であることはまぎれもない。このほかにも曇遷（五四二—六〇七）や法誠（五六三—六四〇）慧超（五四六—六二二）などが悟真寺で念仏業につとめている。

だが豪華な伽藍などはなく、法誠の伝記に

善導の熱禱ぶりを書く。

日没礼讃から長い唱名念仏。善導は熱禱ぶりそのまま、汗まみれの身を仏前から引いた。ふり向いて、少年憚良に気づいた。

「来ていたのか」

「山を歩いたいましたら、この谷へ来てしまいました」

善導の視線はいったん王徐明の面上でとまったが、じきに外ずされた。黒ずくめの方士の衣裳が印象をまぎらわしくさせたのであらう。

「王后は元気かな」

「はい、いまはお城へ戻って王子さまの御看病につとめていらっしやいます」

「王子さまは御不子であつたか」

善導は表情を曇らせた。

君主を重んじないからと言って彼を憎んだり、うとんずる善導ではなかった。この世で一度でも触れ合った人には平等な敬愛の念を

いただくのであつた。

「善導和上、お見忘れですか。實際寺にいた吏生の……」

ようやく王徐明は名乗り出ることができた。

「吏生の……おお、まさにそのとおりであつた。だが、その方士姿が見忘れさせてしまつた」

「私は和上の教えに従つて方士になつたのです」

「私の教えはそうだったかな」

善導はやや戸惑いを表情にみせる。

「和上は生き抜くことを強調なさいました。

何をやって生きようか。蜀の国へ流れてゆきながら思案し続けました。結局、素志を貫きとおす以外にはない、と気づいたのです」

「素志をな……書の道をきわめるのではなかったかな」

「書の道はやはり趣味の域を脱し得ません。あれで食を求めることは無理です。いわんや

魏激先生に去られてはなおさらであります」

中央政界を追われた大臣魏激に殉じて都を捨てた王徐明だった。どんな僻地で呻吟しても魏激の身边に仕え、あの書道を習学できれば、と胸をふくらませたのである。

ところが頼みの綱とした魏激が中央政界へ返り咲いてしまった。それが彼を除くための罠であったことは容易に見抜けたはずなのに。

「魏激大臣も気の毒な最後だったということだのう」

「あれほどのお方でも年老ゆると眼がくすみ、進退を踏み誤るのでしょうか。それはともかく蜀の国まで落ちてきて、官途は全く閉ざされていました。しかし、私の素志はここで生きる以外にございません」

「閉ざされた官途ですか」

俄かに善導の面上で皮膚が弛緩しはじめた。憐れみがこみ上げてきて眼尻はすぼまり、涙がにじんで、たるんだ頬を筋引いてし

たたり落ちていった。王徐明の窮状を、我が身の問題として嘆き悲しまずにはおれない善導であった。

「柿の葉に建白まで書いた私です。この国の吏生として生き抜かねばなりません」

「この国の吏生としてか」

「この国は、道の教えが柱となっていています。方士となることが唯一つの道だと考えました」

「方士となることがな」

天子の道、道教に身を捧げようと決意したというのである。

「幸いにも袁天綱という素晴らしい先生にめぐり遇えました。和上、悦んで下さい。私はその袁先生の信任を受け、数々の秘法も伝授されました」

「そうだったか。それは良かった」

善導は一言も反論しないばかりか、方士となった王徐明を祝福するのだった。

だが善導のもの優さしい表情もやがてけわ

それでよろしいのではないですか」

「そももまいるまい。これだけの寺院ができ僧がおる。それと、観経がこの国で造られたとして誰が何を目的としてあんな物語をこしらえたのか。すくなくとも道教にとって得にはならない話だ」

「得にならない？」

「そうではないか。天子に仕え天子を助ける道教だ。それが宮廷内のごたごたをなぜ經典に仕立てあげねばならないのか。阿闍世王の悪虐ぶりなぞ、民意を王政に叛かせるだけではないか」

「……」

「王の徳を讃え、国家の繁栄を寿（ことほ）ぐ經典を造ったというのなら話は別です。道教は王や国家を潰すためにあるのかね」

「そんな……滅相もない」

「観経が道士か方士の手で書かれたとすれば当然そういうことになる」

どうやらこの対立。方士王徐明が善導にあ

しらわれていることが明らかであった。少年憚良の眼にもそれが判然と映じた。

五

「貴郎は観無量寿経を味読したことがあるかな」

善導のやんわりした説得は、さらに続く。すでに悟真寺のある藍田の谷間には黄昏の黒い影が舞い降りていた。

「ひととおりの披読は致しましたが、味読とまではまいりませぬ」

「韋提希夫人をめぐる王舎城の悲劇は何が原因で発生し、ひろがっていったか、貴郎には読解できたかね」

「さあ……」

「すべてが呪術師の言に耳を傾けたからです。阿闍世王子が王后の身に宿った折も山中に棲む老仙人の命を借りることを占い師から進められたからでしょう。三年経てば死ぬは

ずの老仙人の生命。父の瀕婆娑羅王はその三年間が待てずに老仙人を殺害してしまった。

さらに老仙人の生まれ替わり、阿闍世が誕生するときも呪術師は王夫妻に語りかけている。呪われて生まれ出る王子は将来あなた方に讐(あだ)をなすだろう、いまのうちに殺してしまえ」

「そうでした。大城の楼上から胎児を投げ落したんでしたねえ」

「だが幸い小指を打っただけで胎児は助かった。この「未生怨」を胎児が成長し、阿闍世太子となると、さらに別の呪術師が煽動した。提婆達多だ」

「でもあの人はお釈迦さまのお弟子。従弟だというではありまめぬか」

「釈尊はきびしく呪法、呪術を否定なさった。その意味からも提婆達多は仏弟子の列から外ずされたのです。それを恨んだ彼は阿闍世太子にあることないこと、父王への呪いを吹きこんだ。そこから王舎城の悲劇は始まっ

ている」

「……」

「王や王后、王子に向って呪いをかけることの罪惡をこの經典は説いてもいる。この国でも道士や方士は君側にあつて占星や呪術を成業とする。その罪惡を説いた觀經が、なぜ道教の經典なのだろうか」

「いいえ。私は觀經が道教の經典と申ししているのはごさいません。ただこの国の人の手に成ったもの、と申上げただけです」

王徐明は言いまくられて苦しい抗弁にこれつとめる。

「わしが言っているのは思想の問題で、經典がどこの国の人間によって書かれたかにこだわっているのではない。正しい仏教思想を持った人間か、そうでないかが問題なのです。觀經の作者が誰であろうと、ここまで明細に大乘仏教の精神を語り尽した經典は他にない、とさえ思うほどだ」

「未だ私の読み方が浅かったのでしょう。じ

つくりと検討し直してみます」

善導は静かに座を立おと、

「おお、こんなに暗くなったか」

と堂外の闇を見まわした。

「思わぬ長居をしまして……」

「待ちなさい。悟真寺の夕餉を馳走しようではないか。稗飯だが、谷の七草が炊きこんである。含風殿の贅を尽した美食もだが、なかなか味わいがある」

「そんなことをして頂いては……善導さまのだいじなお食事を減らしてしまうのではありませぬか」

往路で見かけた修行僧の背中の袋を思いうかべた。ここの僧たちは限られた持参食糧を食べ伸ばして修法を続けているのだ。

「なあに、なくなれば草の実だけでも飢えはしのげる」

善導は気楽に言い捨てて堂宇の裏手、厨所の方へ立ち去った。じきに小枝が燃えた火勢にまじって善導の声が届いた。

間もなく山の端に月が現れるであろう。素晴らしい月だから、じっくり眺めておくように。

稗飯は今朝炊いたものを煮直したらしいが、さまざまな谷の草や実を混ぜこんで、じつに豪華な味をした飯だった。

「これは何でしようか」

少年は舌先に甘い味が泌みる弾力性のある植物片を箸で挟みあげた。

「それはな、虎の尻尾だ」

善導は真顔で答えた。

「虎の尻尾ですって」

王徐明が言い添えた。蜀の国にいた彼は、植物の正体を知っていたようだ。

「チェンチュウツアイ（珍珠菜）だよ」

「岩かげで咲く蕨菜さ。なかなか美味であろう」

善導も説明した。

「なぜ虎の尻尾なんて言うんですか」

「だから岩が虎の姿に見えて、その裾に咲く」

この蕨が尻尾さ」

王徐明の言葉にもさっきまでの内攻した重苦しきはない。美味なものを口にすれば誰でも上機嫌になる。

堂内で俄かに明るくなった。月がさし昇ったのだ。

「それでは悟真寺自慢の点心を馳走しようか」

稗飯をたつぷり食した兩人は、ちょっと恨めしげに立ち去る善導を見送った。

だが、やがて小鉢に盛った細く黄色い棒状の菓子を目にすると、思わず手が出てしまった。

蕨衣餅である。日本流で言えばカリン糖である。

乾麺をねって、麵棒で薄く伸ばして棒状に細断したものを砂糖をまぶして揚げてある。悟真寺の蕨衣餅は砂糖のかわりに塩と山椒がまぶしてある。ホロ辛らくて満腹の腹に絶好なのである。口へ運ぶ兩人の手の動きは活発

になった。

「これは和上がお作りになるのですか」

惲良は訊いた。

「終南山へ来ると、材料がふんだんにある。いろいろとこしらえてみたくなる」

「こうしたお料理をなさっているとき、お念仏はどうなるのですか」

王徐明はやや底意をふくんだ質問を發した。

「お念仏か。味見をするたびに唱えるさ。美味なときはいちだんと声が高くなるな」

「失敗したときは？」

「うむ。なんでこんな味になったんだろう、と考えながらの南無阿弥陀仏だから、当然途切れがちになっているな」

善導は屈託なく笑った。

(つづく)

◎読者の皆様へのお願い

弊会会員の年会費は三、〇〇〇円です。月刊誌『浄土』を細々と発行しながら、念仏信仰の増進にと努力しています。新しい読者を広くご紹介下さい。

また誌面においては、『浄土』誌と会員諸兄の皆様とのより一層の繋がりをはかるために、従来よりたびたび企画されたことでもありますが、誌面の数ページをさいて、不定期ながら随時「読者のコーナー」を設けております。左記要領で、どうぞふるってご投稿下さい。誌面充実のために、宜しくご協力下さいませ。

- 一、内容 自由（生活の一コマや我感あるいは思うことなどをエッセイ風におま）とめ下さい。
- 一、枚数 四百字詰用紙七〜八枚程度
- 一、締切 毎月五日

法然上人鑽仰会

「浄土」購読規定

会費一カ年 金三、〇〇〇円

（送料不要）

浄土 五十二巻 十二月号

昭和十年五月二十日

第三種郵便物認可

昭和六十一年十一月二十五日 印刷

昭和六十一年十二月一日 発行

編集人 宮林昭彦

発行人 佐藤密雄

印刷所 長谷川印刷

東京都千代田区飯田橋一―十一―六

発行所 法然上人鑽仰会

電話東京二六二局五九四四番

〒二三 振替東京八一八二一八七番

昭和62年度版

浄土宝曆

＝三上人遠忌慶讃記念号＝

予約発売開始!!

ふるってのお申込みを!!

法然上人鑽仰会が責任をもって編集している「浄土宝曆」。
昭和62年度版がまもなく刷了となります。年末年始の好便
な檀信徒用施本として、広くおすすめいたします。

B 6 判 総ページ数 40ページ

一部単価 65円 (200ブ以上 特価60円)

送料実費 (300ブ以上はサービスします)

◎なお、ご寺院名の印刷なども実費にておこないますのであら
かじめご連絡下さい。

できうるかぎりの便宜もおはからいいたしますので、多くの
方々からのご注文をお願いいたします。

.....お申込み.....

〒102 東京都千代田区飯田橋1-11-6

法 然 上 人 鑽 仰 会

(振替) 東京 8-82187